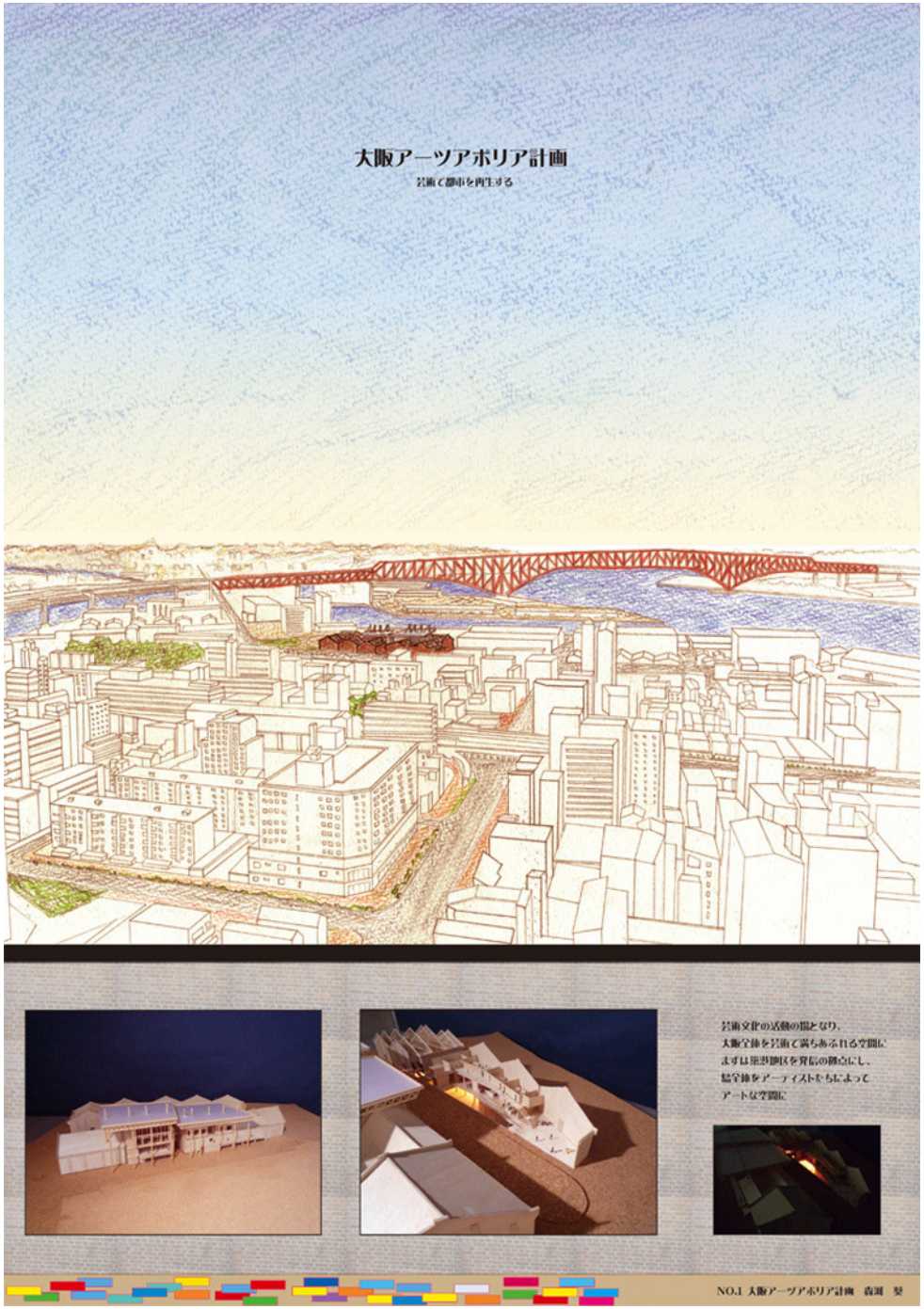
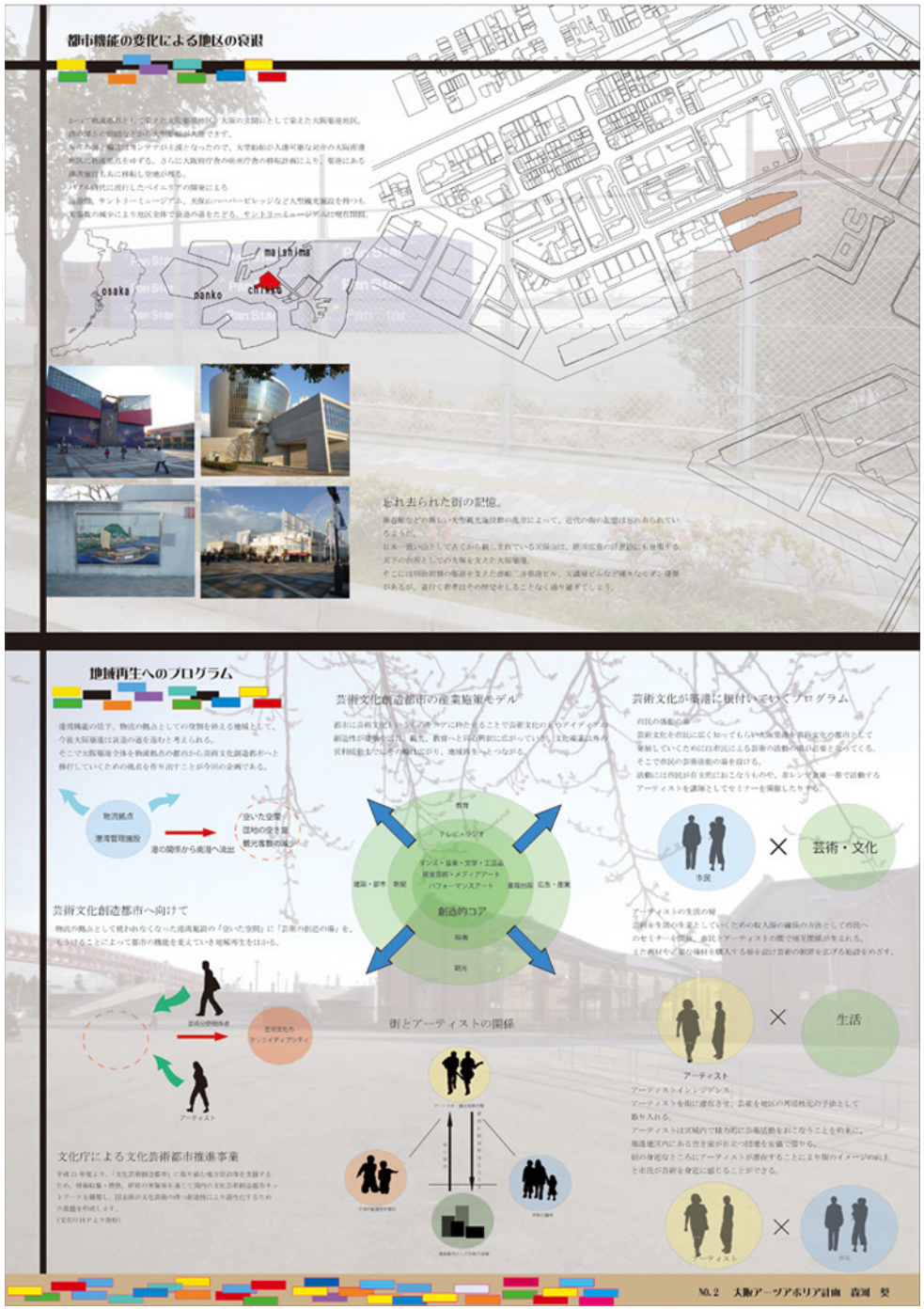

大阪アーツアポリア計画
芸術で都市を再生する
芸術文化の活動の場となり、
大阪全体を芸術で満ちあふれる空間に
まずは築港地区を背景の拠点にし、
監全体をアーティストらによって
アートな空間に
NO.1 大阪アーツアポリア計画　森河　奨


都市機能の変化による地区の衰退
osaka
nanko
chikko
maishima
忘れ去られた街の記憶。
地域再生へのプログラム
芸術文化創造都市の産業施策モデル
芸術文化が築港に根付いていくプログラム
物流拠点
港湾管理施設
港の関西から南港へ流出
空いた空間
団地の空き室
観光客数の減少
教育
アレビ・ラジオ
オンス・音楽・文学・工芸品
視覚芸術・メディアアート
パフォーマンスアート
建築・都市
市民
創造的コア
映画
観光
芸術文化創造都市へ向けて
街とアーティストの関係
文化庁による文化芸術都市推進事業
アーティスト
市民
芸術・文化
生活
NO.2 大阪アーツアポリア計画　森河　奨

全体構想

芸術文化をひろめる古くも新しい芸術文化の拠点

芸術文化の始祖地として、赤レンガ倉庫の再生を担うこと。
築港区でもそれ以外に赤レンガ倉庫を持つことによって
再生建築の連続的な例を示すことになり、現在のこれから使い
古ぼけ並びに残る近代モダン建築や空間を評価する使い方に対する試みを取り組む。

赤レンガ倉庫の再生

赤レンガが持つ様こそノスタルジックな感覚、そのためかそれ以外に倉庫としての役割を終えた後も、
赤レンガ倉庫で例ならの活用が行われる。
やはりから言葉倉庫でもあったり、文化庁であったり人気のスポットになっている場所も多い。
さらに中で人場所通に残る赤レンガ倉庫は地域産業とブランドで区切られ、活用されていなく
それに対してこれら残された存在となっている。

今後期待される建物の再生とは

既存の建物を有効活用することによって地域に溶け込んでいる建物の価値を変えずに有効活用していける手法。
一般的にミュージアムやテラフォーム、コンバージョン、リファインなどいろいろな建築再生手法がある。
日本の社会は現在スクラップアンドビルドにより自然環境の破壊や同の景観の破壊が進んでいると考えている。
そんな中で建築を保存・再生していくことの重要さは今後とても重要になってくるのではないか。

リファインとしてのコンバージョンの提案

建物の用途を変えつつ新しい建築をくみこむ。
築港赤レンガ倉庫では海の景観の一部となっているファサードを残しながら用途を変更していく
コンバージョンの部分と建物のフレームを残して建物を海の状態から必要なものを付けていき、歴史的な記憶を残しながら
建物を新しい建築に繋らせるリファインの部分を融合させていく手法を提案する。

50 年後，100 年後の赤レンガ倉庫周辺の構想

現在も使われている赤レンガ倉庫近辺にある倉庫群は今迄で倉庫の役割を終え、
今迄ではアートのスタジオに利用されたり、アーティストの住宅として利用されるように
なると考え、赤レンガ広場に公共に再へのびていく。

築港赤レンガ倉庫とは

大阪の築港に残るレンガ造倉庫は1920年大阪市は日本最大の商工業都市として発展した時代に住友倉庫により
建てられた。
1928年には臨港鉄道の利用が倉庫の開発を促進各地から貨物列車が到着し、物流の大集積地となった。
しかし戦時統制物流の広域がコンテナ輸送に切り替、海の開発の開発から対岸の大阪南港へと指定が移転。
1999年に倉庫としての役割を終えた。大阪市に移管される。
移管後にアーツアポリア事業と名付けてレンガ倉庫を実験的に芸術の拠点として実験的に利用されたこと
もあったが財政難の不安定が、現在は行き詰まり時を待っている。

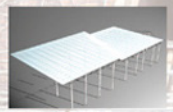
旧称：住友倉庫			
設計：住友合資会社工作部建築課			
竣功時期：大正１２年			
構造規模：	構造	建築面積	延べ床面積
２００号棟南棟	レンガ造２階建	１１２８㎡	２２５７㎡
２００号棟東棟	レンガ造２階建	１１３３㎡	２２６７㎡
３００号棟南棟	レンガ造平屋建	１１３６㎡	１１３６㎡
３００号棟東棟	レンガ造平屋建	１５３４㎡	１５３４㎡

赤レンガ再生へのコンセプトモデル

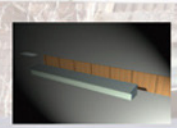
①既存構造の利用
既存の赤レンガ倉庫に使われている鉄骨トラスによる大屋根を保存。
内部空間から鉄骨トラスの構造を見せ歴史を感じさせるようにする。
既存構造を使うことによって有効性も図ることができる。

②新しい構造体を内部に挿入する。
赤レンガ倉庫内に新たに鉄骨の構造体と新型用鉄レースを
挿入。既存構造の補強を図る。
赤レンガの壁体を保存するために鉄骨の構造体とジョイントし
壁の補強保存を図る。

③新しい空間を増設する。
赤レンガ倉庫の内部に挿入した構造体の上に新たな空間をつく
る。既存の赤レンガ倉庫でできる機能とは違う機能の部分を補う
い。また新たな空間を組み入れることによって歴史の対比を楽し
むことができる空間となる。



④新しいもので覆う
既存の赤レンガ倉庫と新旧に増築した部分を、
歴史を感じる壁等赤レンガ片とは対照的な
鉄骨構造が強いガラス地で覆うことにより新しいものと
古いものの融合もあり得ることができる。
また天井から空間を開放することにより
赤レンガ広場内でのオープンスペースを作る。



⑤加える
既存の赤レンガ倉庫の壁面に新しい構造体を付加する。
既存の赤レンガ倉庫とは別の構造をとるのでは相対的
自由な造形をとることができる。

改修場所の選定

海へのアクセスの確保

現在赤レンガ倉庫を通り抜け最水広場にアクセスすることができない。
赤レンガ倉庫にいながら海を近くに感じることができるように海への導路を
赤レンガ倉庫内で南北に通す導路を確保する。

海への桟線上に半屋外の滞留空間を作る

海への動線を確保した後、
海へ向かう動線上に半屋外の憩いの空間を作る。
その滞留空間では新しいガラスのファサードが
見える一方で赤レンガ倉庫本来の姿も見え、
新旧の対比を楽しむ。

赤レンガ倉庫に中心を持たす

現在の赤レンガ倉庫は東西に帯びるのみの建物構成になっている。
新たに作った南北の動線と既存の東西の動線が交わる空間に新しいもので囲まれた
空間を作り赤レンガ倉庫全体の中心をつくる。

時間軸による空間構成

歴史的ファサードの保存

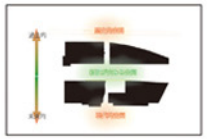
赤レンガ倉庫というものはそこに建物が位置するだけでその地域の歴史性や
赤レンガが持つノスタルジックな感覚に投ることができる。そこで海に面する
ファサードを持つ部分に対してはなるべく既存の赤レンガ倉庫のファサードが
残る計画をおこない現在の雰囲気を形成、維持をおこなう。

新旧が交わる空間

赤レンガ倉庫の敷地内に入るとそこは新旧の混じり合う
空間構成をコンセプトとし、古いものと新しいものが混じる異質な空間の中で
新たな感性を生みだし輝く。

現代的な空間

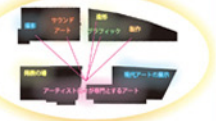
所の海側のファサードを新しいもので構成し、歴史性を感じる赤レンガ倉庫の
敷地にいることを実感しつつも現代的な空間を作っていく。



構成計画

様々なアートの活動ができるような機能を配置

今後赤レンガ倉庫が芸術・文化の活動の拠点として
使われて行くには様々な分野のアートの製作空間を作り
いく。赤レンガ倉庫内に集結することによって
お互いに刺激し合い新たな芸術の可能性を生み出す。
様々なアートの分野が集結アートの特徴によって
製作空間の特徴も変わってくるので
それに適した室内空間を構成する。



アートが一緒になって刺激を受け合い
切磋琢磨する

周辺建物との関係性

赤レンガ倉庫の南には小学校、中学校が隣接しそこに通う
生徒が使えるような「回空間や周辺住民が使えるような
マルチな制作空間を配置しておく。
敷地内にある倉庫を改良した民間ギャラリーの
CASO ではより専門性が高い芸術の企画展示や個展
を開催する。

敷地周辺計画

起き変わり目の活動で使われなくなっていく施設群

アーティストインレジデンスのプロジェクトとして
赤レンガ倉庫周辺にある施設群をアーティスト
の滞在空間として活用する。赤レンガ倉庫内に
滞在型の住宅は別にまに関由まりのみ行う建築や
製作も行う建物などさまざまな用途を設定し
活用していく。

製作棟と総合棟

主に市民、アーティストが製作を行う工房などを配置した
北棟の製作棟。
小規模の美術館、多目的ホール、AIR、商業機能などを入れた
総合棟から赤レンガ倉庫は構成される。

浮水ステージ

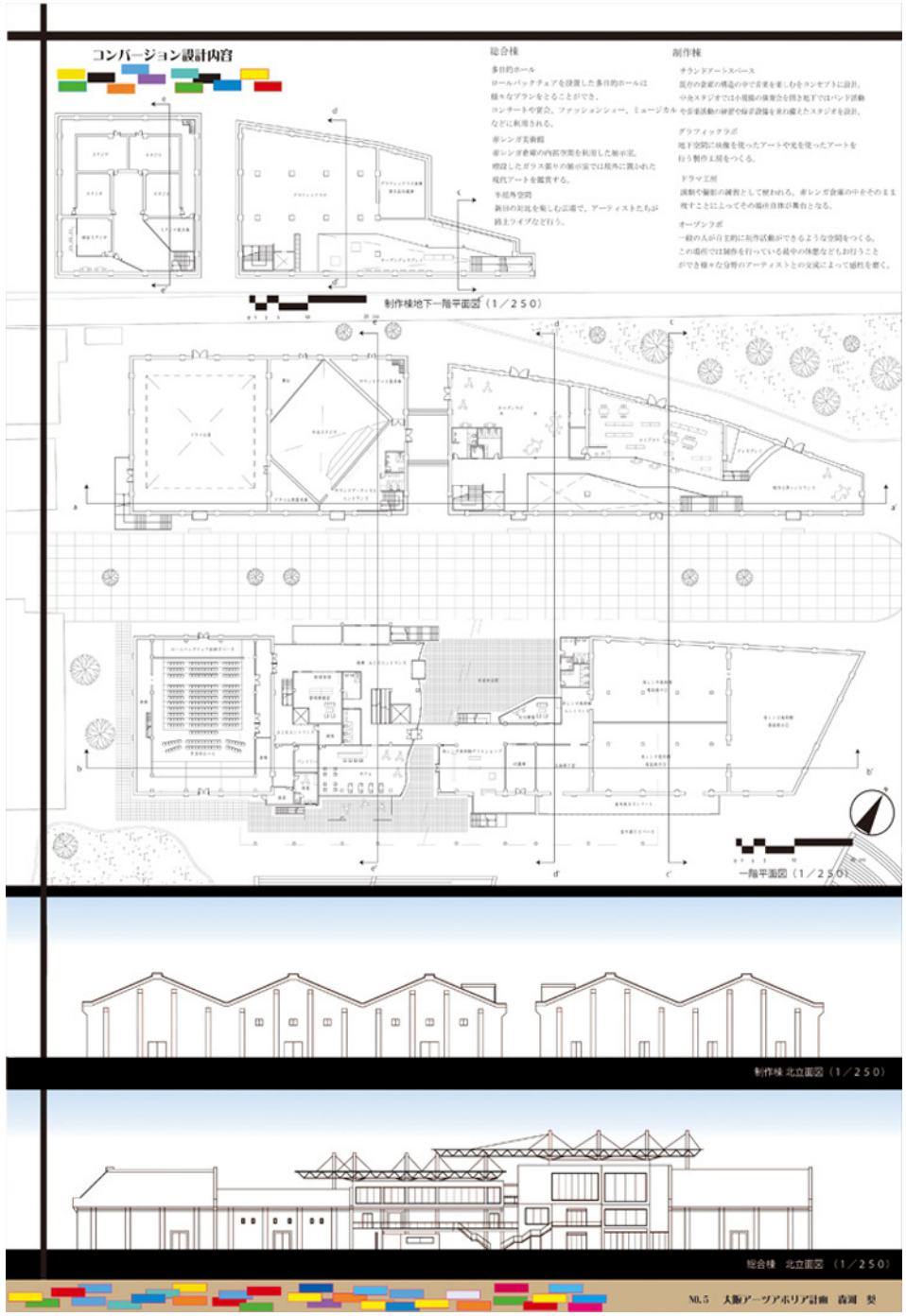
新しく作った海への動線の先に屋外空間でできる
エンターテイメントの場として
海と調和した現存の遊作場跡を一部改良しステージとする。

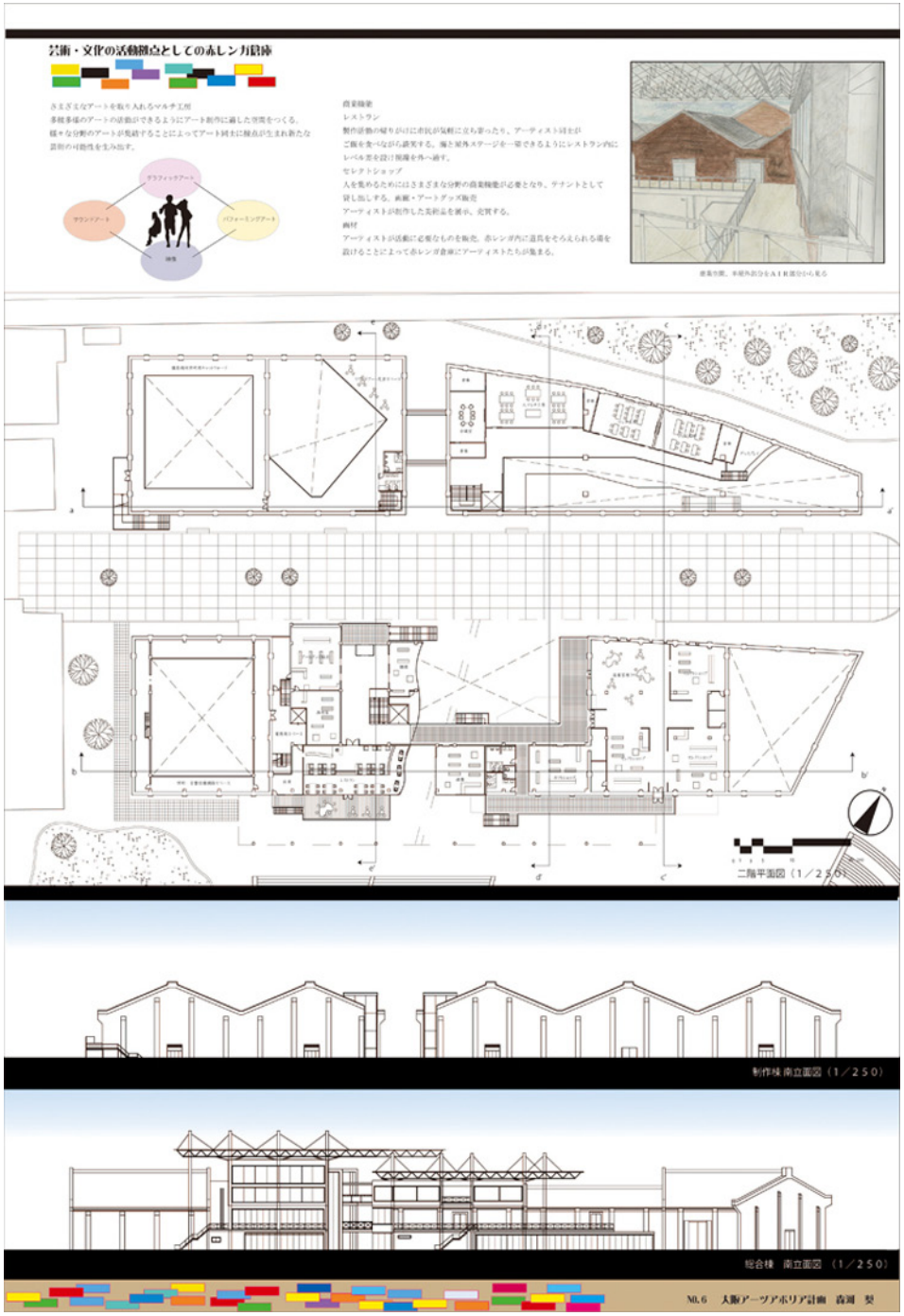
赤レンガストリート

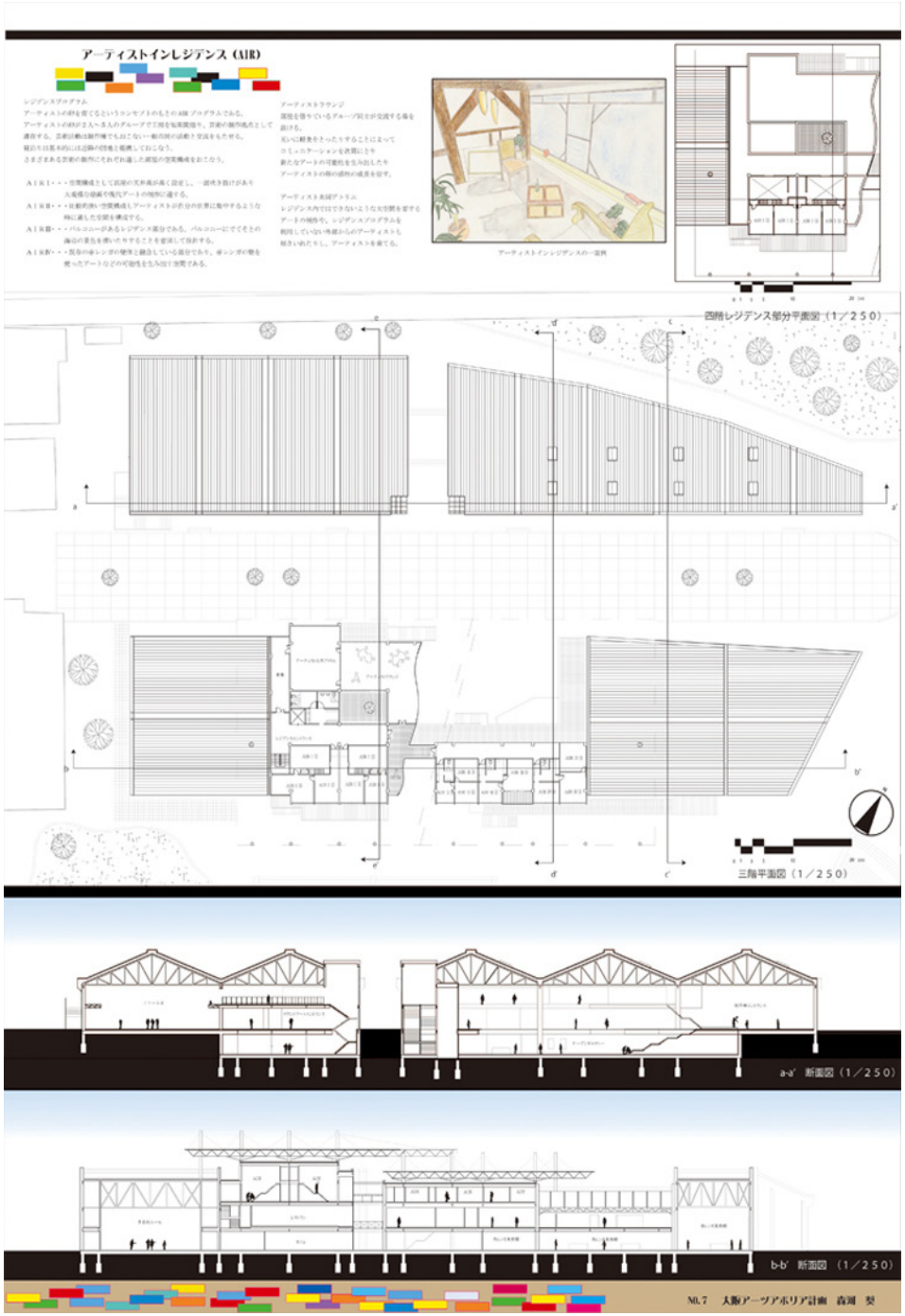
赤レンガ倉庫間を行き来する人々
建物の機能を分離して考えることによって人々の活動を
赤レンガ倉庫内で収まるのではなく外部の空間に
わざと出させるようにした。
赤レンガ倉庫の間にある赤レンガストリートに住人々
の行き来によって賑わいが生まれる。

エンターテイメント広場

エンターテイメント広場は休日に市民やアーティストによる
フリーマーケットを開催し新たアーティストにとれる空間になる。
赤レンガ倉庫敷地内の入口から海への動線にある透水舗装を敷き詰と設定
地盤を確保するのと同時にいろいろな活動ができるようにするための
建造物や、ストリートファニチャーを置かず、広いオープンスペース
を確保する。


コンバージョン設計内容
総合棟
多目的ホール
ロールバックチェアを設置した多目的ホールは様々なプランをとることができ、コンサートや宴会、ファッションショー、ミュージカルなどに利用される。
赤レンガ美術館
赤レンガ倉庫の内部空間を利用した展示室。増設したガラス張りの展示室では屋外に置かれた現代アートを鑑賞する。
半屋外空間
展示の対比を楽しむ広場で、アーティストたちが路上ライブなどを行う。
制作棟
サウンドアートスペース
広がり感覚の構造の中で音楽を楽しむをコンセプトに設計。
小規模スタジオでは小規模の演奏会を開き地下ではバンド活動や音楽活動の練習や録音設備を表わ備えたスタジオを設計。
グラフィックラボ
地下空間に映像を使ったアートや光を使ったアートを行う製作工房をつくる。
ドラマ工房
演劇や舞踊の練習として使われる。赤レンガ倉庫の中をそのまま使うことによってその場所自体が舞台となる。
オープンラボ
一般の人が自主的に制作活動ができるような空間をつくる。この場所では制作を行っている最中の様子などもお行うことができ様々な分野のアーティストとの交流によって感性を磨く。
制作棟地下一階平面図（1／250）
一階平面図（1／250）
制作棟 北立面図（1／250）
総合棟　北立面図　（1／250）
NO.5　大阪アーツアポリア計画　森河　奨


芸術・文化の活動拠点としての赤レンガ倉庫
さまざまなアートを取り入れるマルチ工房
多様多様のアートの活動ができるようにアート制作に適した空間をつくる。様々な分野のアートが集結することによってアート同士に接点が生まれ新たな表現の可能性を生み出す。
商業機能
レストラン
製作活動の帰りがけに市民が気軽に立ち寄ったり、アーティスト同士がご飯を食べながら談笑する。海と屋外ステージを一望できるようにレストラン内にレベル差を設け開放感を共へ通す。
セレクトショップ
人を集めるためにはさまざまな分野の商業機能が必要となり、テナントとして貸し出しする。画廊・アートグッズ販売
アーティストが制作した美術品を展示、売買する。
画材
アーティストが活動に必要なものを販売。赤レンガ内に道具をそろえられる場を設けることによって赤レンガ倉庫にアーティストたちが集まる。
サウンドアート
グラフィックアート
パフォーミングアート
演劇
半屋外部分をA1展望台から見る
二階平面図（1／250）
制作棟 南立面図（1／250）
総合棟　南立面図　（1／250）
NO.6　大阪アーツアポリア計画　森河　奨


アーティストインレジデンス (AIR)
アーティストインレジデンスの一案例
四階レジデンス部分平面図（1／250）
三階平面図（1／250）
a-a' 断面図（1／250）
b-b' 断面図（1／250）
NO.7　大阪アーツアポリア計画　森河　奨

立面・断面計画
c-c' 断面図（1／250）
d-d' 断面図（1／250）
e-e' 断面図（1／250）
NO.8　大阪アーツアポリア計画　森河　奨